なぜペルシア語は Forward Gapping が基本なのか
－SOV から逸脱するいくつかの証拠－

Jahedzadeh Shorblagh Behnam
京都大学大学院

Abstract

In Persian Language, Forward Gapping and constituent Backward Gapping are possible. Forward Gapping is comprehensive but Backward Gapping is limited. In this article, I argued that there are two reasons that Persian Language selects Forward Gapping without any restriction. First, although in simple sentences Persian word order is Subject-Object-Verb (SOV), in complex sentences it prefers Subject-Verb-Object (SVO) rather than SOV. Second, because of rich Verb conjunction in Persian, in Backward Gapping the Verb just agrees with one of the persons of the two sentences and the Gapping become non-constituent. When Verb comes first, just like Forward Gapping, there is no agreement restriction.

1. はじめに.

われわれ人間は世界の現象を言葉で表現するときに，伝えたい情報を一定の時間軸に沿って言い述べる。言語の最も小さい単位である音素から大きい単位の談話まですべて一つ一つ線条的に並列される。言い換えれば，言語は時系列な現象であり，同時に二つの音，語彙や構文を発せない。したがって，言語における並列は強制的となる。並列されることによって構文に類似事態が出現し，繰り返す必要のない情報が省略される。Marjorie(2005)が述べているように，省略は本来，構文の統語構造に参与する可能性のあった語や節の非符号化行為である。これは自然言語でなにもかも符号化する必要がないという言語の効率性からくる特性である。Gapping は，構文における省略(Ellipsis)の一種で，任意的である[1]。同じ動詞を持つ二つの構文が並列された場合，類似の意味を有していれば，二つの動詞のいずれかが省略される統語処理システムで，普遍的な言語現象である[2]。以下，英語と日本語の用例を参照されたい。

(1.a) I ate fish, Bill ate rice, and Harry ate roast beef.
(1.b) I ate fish, Bill rice, and Harry roast beef.

(Ross 1970:250)

(2.a)花子はビールを注文した。太郎はワインを注文した。
(2.b)花子はビールを，太郎はワインを注文した。

本論文では，ペルシア語[3]の Gapping はなぜ Forward Gapping が基本になっているかに焦点を当て，二つの理由を挙げる[4]。一つは Forward Gapping において異なった人称の不一致を回避するためであり，もう一つは，ペルシア語の語順の問題，つまり，動詞の上昇による SOV からの逸脱であると考えられる。

並列された構文では，先の動詞を残し，後の動詞を省略する現象を Forward Gapping(FG)，先の動詞を省略し，後の動詞を残すのを Backward Gapping(BG)という。

Ross(1970)によると日本語のように語順が SOV である言語では Gapping が BG となる。語順が SVO である英語のような言語では Gapping が FG の形で現れる。

上記の用例からも分かるように，英語は FG，日本語は BG である。

2. 人称と Gapping

2.1. ペルシア語での Gappping

ペルシア語では Gapping が基本的に FG である。

(3.a) man čāy xord-am ū qahve (Ø).
I tea ate-1sg he/she coffee.
(I drink tea, and he/she coffee.)
(3.b)? man čāy (Ø), ū qahve xord.
I tea he/she coffee eat.
(I drink tea, and he/she coffee.)

ペルシア語では FG が基本的であると言えるのは，どの人称やどの数でも Gapping が無制限に可能だからである。また，ペルシア語の動詞には 3 つの人称と，単数と複数の活用語尾があり，重なり合う人称と同じ人称の数以外の数と他の人称の単数と複数を持ち合わせるとのべ 30 通

りの非等位的な BG が出現する可能性がある。たとえば，一人称単数は同じく一人称単数とは非等位的にならない。従って，一人称単数と一人称複数，また，一人称単数と二人称と三人称のそれぞれの単数と複数を想定すれば，他の人称の非等位的な並列の可能性もある程度把握できる。

表1：動詞による数と人称の活用語尾（括弧の中は口語的）

	単数		複数	
	(present)	(past)	(present)	(past)
一人称	-am	-am	-im	-im
二人称	-i	-i	-id (in)	-id (in)
三人称	-ad	Ø	-and (an) [5]	-and (an)

以下，一部の非等位的な BG の用例を参照されたい。

(4)? to čāy (Ø) ū qahve nūšīd.　⇒人称も数も一致しない
you tea　s/he coffee　drank
(You drank tea, and s/he coffee.)
(5)? mā čāy (Ø) ū qahve nūšīd.　⇒人称が一致しない
we　tea　s/he coffee　drank
(We drank tea, and s/he coffee.)
(6)? šomā　čāy (Ø) ū qahve nūšīd.　⇒人称も数も一致しない
you　tea　s/he coffee　drank
(You drank tea, and s/he coffee.)
(7)? anhā čāy (Ø) ū qahve nūšīd.　⇒数が一致しない
they　tea　s/he coffee　drank
(They drank tea, and s/he coffee.)

上記の(4)から(7)までの用例がすべて BG の用例である。このように，異なった人称の構文の並列を非等位的と呼ぶ。非等位的 BG を認めるネイティブもいれば認めないネイティブもいる。BG は等位の場合認められる。以下等位的な BG[6]の用例である。

(8) Hasan be Tehran va Ali be Tabriz raft.
Hasan　to Tehran and Ali　to Tabriz went

(Hasan went to Tehran, and Ali to Tabriz.)

このように，ペルシア語では非等位的な BG の場合，Gapping に制限の力がかかる。これは，　異なる人称の並列からくる制限だと思われる。上記の(4)から(7)までの用例はもちろんすべて FG では可能である。

ペルシア語の人称による非等位性をより正確に理解するためには，ここでは日本語において非等位性の出現可能性について触れておきたい。

2.2. 日本語の Gapping の場合

日本語では FG が許可されないので，Gapping は BG のみである。

(9)私はお茶を(Ø)彼はコーヒーを飲んだ。
(10)*私はお茶を飲んだ彼はコーヒーを(Ø)。[7]

日本語の場合，人称による動詞の活用がきわめて限られていて，以下のような非等位的な BG は生じるのは限定的である。

(11)*彼は自転車を，私は車をほしがっている。

日本語では限定的であるが V の活用形式と人称との一致が要求される。以下 Iwasaki(1993)の用例をあげる。例(12)は S と V が一致しているので正しい文であるが，(13)はそれが一致しないとして非文とされる。

(12) watashi wa kanashikatta.
I TOP sad.PAST
(I was sad.)
(13) *merii wa kanashikatta.
Mary TOP sad.PAST
(Mary was sad.)

(Iwasaki 1993:3)

さらに，益岡(2006)は，「ほしい」，「寒い」，「痛い」のような日本語の感情形容詞は，人の内面の状態を表す点で主観性の強い表現である述べている。したがって，「このような感情形容詞を述語とする文の主体は

普通，1 人称（疑問文では 2 人称）である。」（益岡 2006:21）

(14)あなたは車がほしいですか？
(15)？太郎は車がほしい。

(ibid)

表 2．日本語の感情動詞と人称による制限

人称	ほしい
1	○
2	Δ[8]
3	×

(Jahedzadeh 2013:57)

また，中崎(2006)は授受表現の観点から人称の選択について論じている。氏は，「話し手主観性」と人称詞の関係性について以下の用例を挙げ，授受表現における。以下，中崎(2006)の例文である。

(16)あの子にチョコレートを焼いてもらったのか（*いただいたのか）
(17)彼女は君に助けてもらったそうだね（？いただいたそうだね）

（中崎 2006:8）

さらに，名詞句の並列でも非等位性が生じる可能性がある。

(18)太郎君は若い。
(19)山口先生はお若い。
(20)？太郎君も山口先生もお若い。

表 3．日本語における内外関係と敬語動詞の使用[9]

対称	普通動詞	尊敬動詞	謙譲動詞
内	○	×	○
外	○	○	×

(Jahedzadeh 2013:57)

また，表 4 からもわかるように，人称による敬語動詞の使用にも制限があり，自分を含む「内」の人間に対しては尊敬語を，「外」の人間に対しては謙譲語使えないのである。

以下の (21)では尊敬を示すべき存在としての「総理大臣」という S と敬語を使わなくてもよい S との並列が非等位的となり, SVA 規則による「抑制の力」が容認度を下げる。

(21)？私たちは歩きで, 総理大臣は専用車でスタジアムに向かわれた。

上記のような非等位的な並列の用例は，曖昧な表現として話者によって避けられることが予想できる[10]。

このように，日本語と比べペルシア語の人称の活用が豊富なため，非等位的な BG が出現する可能性が極めて高い。Gapping は等位性を求めることから，ペルシア語は人称の制限がかからない FG を取ると思われる。

2.3. 語順の問題

伝統文法や先行研究では「ペルシア語は語順が SOV」とされてきている[11]。確かに単文ではペルシア語は SOV であるが，複文，知覚動詞やムードを表す動詞は SOV 語順から逸脱し，動詞が先に置かれる場合が多い[12]。下記の例を参照されたい。

(22.a) Hasan xāne sāxt.
Hasan house made
(Hasan built house.)
(22.b) * Hasan sāxt xāne.
Hasan built house
(23.a)Ali mi-dān-ad [ke Hasan xāne sāxt].
Ali ind-know-3sg that hasan house built
(Ali knows that Hasan built a house.)
(23.b)*Ali [ke Hasan xāne sāxt] mi-dān-ad[13].
Ali that Hasan house built ind-know-3sg

上記の用例(22.a)は単文であり，主語，目的語と動詞といった語順に従っていて正しい文となっている。SVO の語順を示す(22.b)は誤用である。一方(23.a)では補文が主節の外に置かれ，いわゆる動詞が上昇し，枠外配置で処理されている。付属節が構造内で述べられた(23.b)が誤用となっている。

3. 先行研究

Marashi(1971)以外の研究はペルシア語の語順を SOV としている。Marashi(1971)はペルシア語における Gapping に触れ，ペルシア語は Gapping が FG だから語順は SVO だと結論している。Darzi(1996)は「語順と Gapping の現れ方との間に関係がない」として，Marashi(1971)の SVO 論に異を唱え，SOV・SVO 両語順説に対しても反対意見を述べている。Darzi(1996)は SOV に反する用例をあげながらも「どちらかと言えばペルシア語は SOV 言語だ」としている。

Vennemann(1974)はアラビア語との接触によってペルシア語は VO 化しつつあったがそのプロセスが完了しないままになっていると述べている[14]。

Dabir moghaddam(2001)はペルシア語語順に関する通時的な研究において，ペルシア語は SOV から SVO への変化段階にあると指摘している。Karimi(2005)もペルシア語の語順を SOV とするが SOV から逸脱する掻き混ぜ文(scrambling)や補文の ke 節の枠外配置についても触れている。Hojatollah Taleghani(2006) はモダリティを示す動詞による SVO 形式や ke 節による CP の枠外配置に触れているが最終的に SOV 語順の立場に立つ。Aghaei(2006)もペルシア語における ke 節の構造内や枠外配置に置かれるケースを議論している。

4. SOV から逸脱するケース

4.1. ke節によるSVO

ke が関係代名詞として，埋め込み文に生起する。従属節に生起する ke には「修飾節，理由，前件の説明，結果，唐突，時間，強調や軽視[15]」の意味がある。ke 節が生起する複文では動詞が上昇し，ke 節が動詞の後に置かれる。

(24.a) Hasan mi-dān-ad　[ke Ali ‘in xāne rā sāxt]

Hasan Ind-know-3sg. that Ali this house ACC built-3sg.

(Hasan knows that Ali built this house.)

(24.b) *Hasan [ke Ali ‘in xāne rā sāxt] mi-dān-ad.[16]

Hasan that Ali this house ACC built-3sg Ind-know-3sg.

(25.a) man bāvar dār-am [ke Hasan varšekast šode.]

I believe have-1sg thah Hasan bankrupt became

(I believe that Hasan became bankrupt.)

(25.b)*man [ke Hasan varšekast šode] bāvar dār-am.

4.2. tā 節による SVO

tā 節は ke 節と同様枠外配置される節である。tā は「理由」や「時間」の意味を表す。理由を表す tā 節は常に枠外配置される[17]。

理由を表す tā 節の例：

(26.a) pul jam? Mi-kon-am [tā māšin be-xar-am.]

money gather Ind-do-1sg in order to car Subj-buy-1sg

(I am saving money to buy a car.)

(26.b)*[tā māšin be-xar-am.] pul jam? Mi-kon-am.

(27.a) in qors ro boxor [tā sar dard-et xūb še!]

this pill ACC eat in order to headache-POSS2sg good become

(Take this pill to relieve your headache.)

(27.b)*[tā sar dard-et xūb še!] in qors ro boxor.

時間を表す tā 節の例[1]：

(28.a) sabr mi-kon-am tā to bi-ā-i.

wait IMPF-do-1sg until you Subj-come-2sg

(I wait until you come.)

(28.b) tā to bi-ā-i sabr mi-kon-am.

until you Subj-come-2sg wait IMPF-do-1sg

---

[1] なお, (28.a)と(28.b)を二人のネイティブに 提示したところ,「二つとも正しいが, (28.b)の方が分かりやすい」というコメントをもらった。筆者も同感である。

(I wait until you come.)

4.3. 一部の知覚動詞による SVO

ペルシア語では知覚動詞による複文における SVO が定着しており，SOV の配列は不可能である。以下 xāheš kardan. (ask/request)，fekr kardan (to think), xāstan (to want), entezār daštan (to expect)の用例をあげる。なお，これらの補文では ke が省かれることは可能である。

◆ xāheš kardan. (ask/request)

(29.a) Simin az man xāheš kard [(ke) nāme-ha-š-o tayp kon-am.]

Simin from I ask did that letter-pl-REF-ACC type do-1sg

(Simin asked me to type her letters for her.)

(29.b)* Simin az man [(ke) nāme-ha-š-o tayp kon-am] xāheš kard.

◆ fekr kardan (to think)

(30.a) fekr kard-am [(ke) to rafti.][18]

think- did-1sg that you went-3sg

(I thought that you had gone.)

(30.b)* [(ke) to rafti.]fekr kard-am.[19]

◆ xāst-an (to will/to ask sb)

(31.a) xāst-am [(ke) māšin be-xar-am] pūl na-dāšt-am.

wanted-1sg that car Subj-buy-1sg money NEG-had-1sg

(I want to buy a car, but I had no maney.)

(31.b)* [(ke) māšin be-xar-am] xāst-am, pūl na-dāšt-am.

◆ entezār dāšt-an (to expect)

(32.a)entezār dāšt-am [(ke) be didan-e man bi-ā-i.]

expect had-1sg that to see-of I Subj-come-2sg

(I expected you to come and visit me.)

(32.b)*[(ke) be didan-e man biā-i.] entezār dāšt-am

that to see-GEN I come-2sg expect had-1sg

補文(complementizer phrase (CP))が枠外配置される他の動詞の例。

◆◆ goftan (to say)

(33.a) Kimia goft [(ke)　parviz xūne nist.]

Kimia said that Parviz home NEG-is.

(Kimia said that Parviz is not at home.)

(Karimi 2005:8)

(33.b)* Kimia [(ke) parviz xūne nist.] goft.

Kimia that Parviz home NEG-is　said

◆◆ neveštan (to write)

(34.a) dar nāme be doxtar-aš　nevešt [ke dūst-aš dār-ad.]

In letter　to　daughter-POSS wrote that love-REF have-3sg

(He wrote to his daughter In the letter,that he loved her.)

(34.b)* dar nāme be doxtar-aš [ke dūst-aš dār-ad] nevešt.

In letter　to daughter-POSS that love-REF have-3sg wrote

以上,「書く」や「言う」のような動詞は補文を伴う動詞である。知覚動詞や neveštan (to write), goftan(to say)や didan(to see)のような CP を伴う動詞が CP の量が拡大したことによって構造内で処理が困難となり, V の上昇によって CP が枠外に配置されたと思われる。CP を伴わない xordan (to eat)や xaridan(to buy)のような動詞には同じような動きを確認できない。

4.4. ムードを表す動詞の上昇

ペルシア語ではムードを表す「momken ast …(it is possible…), (dorost ast ke…(it is correct that…(but)…, majbūr būdan…(to be obliged…)などのような助動詞も上昇し, 付属節の枠外配置が生じる。

◆ momken būdan (to be possible)

(35) Sārā momken-e (ke) mariz bā-š-e.

Sara possible-is　(that) sick-Subj-is

(Sārā may be sick.)

(Hojatollah Taleghani 2006:43)

◆ehtemāl dāštan (to be probable)

(36)ehtemāl dār-e (ke) Sārā be in mehmuni bi-y-ād.

possible have-3rdsg. (that) S. to this party Sub-come-3rdsg.

(It is possible that Sārā comes to this party.)

(ibid)

4.5. 掻き混ぜ文で上昇する動詞

特に会話では，掻き混ぜ文で動詞が上昇し，目的語は動詞の後に置かれる。述語文ではコピューラが上昇し，名詞（句）は枠外配置されることがある。以下の例を参照されたい。

(37) in bude ast natije-ye adam-e tavajjoh be zabān-e fārsi kea az badv-e dowlat-e āl-e saljuq dar iran ruy dād.

(such (lit.,this)was the result of the lack of attention [given] to the Persian Language which was prevalent (lit.,was produced) in Iran from the beginning of the reign of Saljuks.)

(Lazard 1992:209)

(38.a) šōhar-am doktor-e.

husband-POSS doctor-is.

(My husband is doctor.)

(38.b) doktor-e šōhar-am.

doctor-is husband-POSS

(39.a) hava sard-e

weather cold-is

(It is cold.)

(39.b) sard-e hava.

cold-is weather?

(It is cold.)

4.5. 1. 枠外配置が不・可能な目的語

主語，目的語，動詞が生起する文では間接目的語であれば，格の有無に関係なく枠外配置されるが，直接目的語の場合，対格が後置される目的語のみ枠外配置が可能である。

間接直接目的語の例文

(40.a) Hasan diruz (be) Ālmān raft.
Hasan yesterday (to) Germany went
(Yesterday, Hasan went to Germany.)
(40.b) Hasan diruz raft (be) Ālmān.
Hasan yesterday went (to) Germany
(Yesterday, Hasan went to Germany.)

直接目的語の例文

(41.a) bačče ǧazā-š-o xord.
child meal-REF-ACC ate
(The child ate his/her meal.)
(41.b) bačče xord ǧazā-š-o.
child ate meal-REF-ACC
(The child ate his/her meal.)

一方，対格を伴っていない直接目的語を枠外配置で述べることができない。

(42) * bačče xord ǧazā-š.
child ate meal- REF
(The child ate his/her meal.)

このように，複文での動詞の上昇，SVO で定着している知覚動詞やムードを表す動詞などもあり，ペルシア語は語順が単純に SOV とは言い切れない。動詞を先に置くという性質は Gapping でも現れ，ペルシア語では FG が基本となるもう一つの理由であると思われる。

5. まとめ

本論文ではペルシア語において FG が基本である理由は「FG では人称の不一致が回避できる」及び「複文の ke 節や Ta 節による SVO や，知覚動詞やムードを表す動詞，それにスクランブリングにより動詞が上昇する」ためとした。[20]

ペルシア語は複文では V が左側に移動する傾向が強く，ムードを表す動詞は SVO 形式で定着しているなど，ペルシア語は単純に SOV 言語だとは言いきれない。ペルシア語は SVO の特徴も備えており，日本語のような厳格な SOV 言語ではない。よって，Gapping でも先に動詞を残すのもこのような特徴からくると思われる。

また，ペルシア語では動詞の人称と数の活用語尾が豊富であり，非等位的な BG が出現する可能性が極めて高い。BG では異なった人称の並列の場合，非等位性が生じることから，Gapping には制限がかかってしまう。しかし，FG では人称と動詞の不一致が避けられ，V を先に置くという，いわゆるオープンな形式をとりたがる性質からくると考えられる。

ただし，Gapping は任意的であり，動詞を省略しないで構文を並列する場合もある。また，音声言語では様々なアレンジが可能である。曖昧な表現や非等位的な Gapping を避けるため，実際の会話では省略されない場合もあれば，話者が談話の中である事柄を発してから思い出したことをさらに述べたりして一般的な形式に反する可能性もある。

注

[1] Marjorie(2005)は Ellipsis は普遍的な言語現象であると述べている。また，言語によってその範囲が異なるとし，以下のように定義している。

“Syntactic ellipsis is the nonexpression of a word or phrase that is, nevertheless, expected to occupy a place in the syntactic structure of a sentence.”

(Marjorie 2005:3)

[2] 対比の意味を伝えたい場合，二つの構文が同じ動詞を持っていても省略は不可能となる。以下の用例を参照されたい。

(1)太郎は京大に入学したが，花子は東大に入学した。

[3]本研究で扱うペルシア語はイランの首都，テヘランで使われているイランにおける標準ペルシア語である。

[4]本研究は，大阪大学大学院言語文化研究科の『イラン研究』第 9 号に掲載された Jahedzadeh(2013)を発展させたものである。

[5]括弧の中の形態は会話で使われる傾向が強い。

[6]等位的な BG の構文並列は第 3 人称のみ可能である。一人称や二人称では並列詞の va や-o によって名詞句が並列される。

(1)man be Tehran va Tabriz raft-am
I to Tehran and Tabriz went-1sg.
(I went to Tehran and Tabriz.)

[7]Kuno(1978)も日本語における FG の例を非文としている。しかし，特に音声言語ではこのような FG が承認される可能性がある。音声言語では，その場面で言い直されたり確認したりすることが可能であり，書き言葉に比べ柔軟性があると思われる。また，二つ目の構文を「私はお茶を飲んだ。彼はコーヒー。」のようにすると音声言語では認められうる。

[8]なお，疑問文では二人称も可能であることから∆にした。

[9]○は可能，×は不可能を示している。

[10]筆者は日本語のネイティブに非等位的な BG の構文を提示し，正誤判断を求めたとき，提示された非等位的な BG を等位的な表現に直されたり，Gapping を避けた表現で言い直されたりした。
例：彼は自転車をほしがっている。私は車がほしい。

[11]Soheili-Isfahani(1976), Lazard(1992), Taghvaipour(2004), Karimi(2005), Hjjatolla Taleghani(2006), Aghaei(2006), 吉枝(2011)など

[12]ペルシア語では名詞を修飾する関係代名詞は英語と同様名詞の後に置かれる。

(1)aks-e Ali ke be-h-et nešān dād-am.
Picture-GEN A which to you show give-1sg
(The picture of Ali which I showed you.)

[13]なお，埋め込み文を主題化して述べれば可能となる。

(1)Ali xāne sāxtan-e Hasan ra mi-dān-ad.
Ali building house-GEN Hasan ACC Ind-know-3sg

(Ali knows Alis building of house.)

[14] Vennemann(1974)のいうアラビア語の影響については以下のように反論することができる。

まず，アラビア語の影響によってペルシア語が SVO 化したとしたのであれば，なぜほとんど知覚動詞だけがその変化を被ったのか疑問が生じる。さらに，CP を枠外配置することは他のインド・ヨーロッパ諸語にも見られ，アラビア語の影響の結果とは考えられない。また，アラビア語の影響下にあったペルシア語の場合と同様に，日本語も何世紀に渡って中国語の影響下にあったが，SVO 型にはならなかった。従って，ペルシア語の SVO 化は本来的だと判断することができる。

[15] شهیدی(1385)

[16] ke 伴う付属節は名詞化すれば構文全体が単文となり SOV は可能となる。

(1) Hasan [sāxtan-e xān-e Ali] rā mi-dān-ad.
Hasan building-GEN house-GEN Ali ACC Ind-know-3sg
(Hasan knows the building of house by Ali)

[17] 時間を表す tā は主節より先に生起する。

(2) [tā to be-resi], ǧazā āmāde ast.
while you Subj-reach meal ready is
(The meal will be ready when you arrive.)

[18] ペルシア語は Null-subject language（主語省略可能な言語）である。

[19] 上記の用例は ke 節を名詞化して述べると可能となるが意味が変化してしまう。

(1)man be [raftan-e to] fekr kard-am.
I to going-of you think did-1sg
(I thought about your action of going.)

ただし，(1)と(28.a)の構文は同様な意味を表さない。

[20] 同じく SOV 言語であるアゼルバイジャン語では BG も FG も可能であるが FG のほうが一般的である。

(1)men Gəncə-də işlir-əm, Vaqif Baki-da(Ø).
I Ganja in work-1sg V Baku-in
(I work in Ganja, Vaqif in Baku.)

(2)men Gəncə-də(Ø), Vaqif-isə Baki-da işlir.
I Ganja in V-CON Baku-in work
(I work in Ganja, Vaqif in Baku.)

一方，SOV 言語であるトルコ語の 4 人の母語話者に以下の FG の用例と非等位的な BG の用例を確認したところ，4 人ともどちらとも正しいという答えをした。では，どちらが一般的でよく使われるかという質問に対して，2 人は非等位的な BG が，もう 1 人は FG が，残りの 1 人は FG にも非等位的な BG にも文法的な誤りがあるから，それぞれの人称に一致する動詞を省略しないで発するべきだという判断を下した。

(3) ben Istanbul-da, abla-m ise Ankara-da çalışıyor. （非等位的な BG）
I Istanbul in brother-1POSS CON Ankara in work
(I work in Istanbul, My brother in Ankara.)

(4) ben Istanbul-da çalışıyor-um, abla-m ise Ankara-da. (FG)
I Istanbul in work-1sg brother-POSS CON Ankara-in
(I work in Istanbul, My brother in Ankara.)

参考文献

Aghaei, Behrad (2006), “The Syntax of Ke-Clause and Clausal Extraposition in Modern Persian”. Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.

Dabir Moghaddam, Mohammad (2001) “Word order Typology of Iranian Languages”, The International Journal of Humanities, vol. 8, No. 2, pp. 17-23.

Darzi, Ali (1996), “Word order, NP movements, and opacity conditions in Persian”, Ph.D. Dissertation. University of Illinois at Urbana-Champaign.

Jahedzadeh Shorblagh Behnam (2013),「日本語とペルシア語における並列－両言語における Gapping の仕組み－」『イラン研究』第 9 号，大阪大学大学院言語文化研究科，44-60.

Hojatollah Taleghani Azita (2006), “The Interaction of Modality, Aspect and Negation in Persian” PhD Dissertatin, the University of Arizona.

Iwasaki, Shoichi. (1993), “Speaker and Subjective Phenomena”. Subjectivity in grammar and discourse.1-15

Karimi Simin (2005), “A minimalist approach to scrambling: evidence from Persian”. Mouton de Gruyter.

Lazard, Gilbert. 1992. “Grammar of Contemporary Persian”. Publisher: Mazda.

Marashi, Mehdi. (1971), “The Persian Verb: A Partial Description for Pedagogical Purposes”, The University of Texas at Austin. Ph.D. Dissertation.

Marjorie, J .McShane (2005)，”A theory of Ellipsis”. Cary, NC (USA): Oxford UniversityPress.

益岡隆志・田窪行則.2006『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版

中崎温子 (2006)「「もらう」系コミュニケーションにおける「話し手主観性」と人称詞ハイアラーキー」、愛知大学語学教育研究室紀要『言語と文化』第 15 号，1-20

Ross, J. R.: 1970, ‘Gapping and the Order of Constituents’. In: M. Bierwisch and M. Heidolph (eds.): Progress in Linguistics. The Hague: Mouton, 249-259.

شهیدی سید جعفر، به کوشش:دکتر غلامرضا ستوده، دکتر ایرج مهرکی، اکرم سلطانی. (1385)، «فرهنگ متوسط دهخدا»، ناشر: مؤسسه انتشارات و چاپ دانشگاه تهران.

Soheili-Isfahani, Abolghasem (1976) “Noun phrase complementation in Persian”. Ph.D. dissertation, Department of Linguistics, University of Illinois at Urbana.

Taghvaipour, Mehran. (2004)、” An HPSG Analysis of Persian Relative Clauses” University of Essex, CLSI Publications

Vennemann, Theo. (1974), “Topics, subjects, and word order; from SXV to SVX via TVX” J.M. Anderson, C. Jones (Eds.), Historical linguistics, North-Holland, London (1974), 339–376

吉枝聡子(2011)『ペルシア語文法ハンドブック』、白水社